

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2025 年度
氏名	青木彩恵	指導教員 (主査)	高橋稔教授

論文題目	小児期のマルトリートメント体験が否定的な認知を媒介し 成人期の抑うつ症状に与える影響——認知的フュージョンを媒介変数として——
------	--

本文概要

【問題と目的】マルトリートメントとは「養育者から子どもへの不適切な関わり」を指し、子どもの心身の発達を阻害するばかりではなく成人期の精神的健康に深刻な影響を及ぼす。Nelson et al. (2017) は、抑うつ障害患者の約半数が小児期にマルトリートメントを経験していたことを報告し、さらにその経験がうつ病の有病率を約 2.66 倍高めることを示した。日本における調査では、比較的軽度なマルトリートメントの発生率は高く（唐他，2005），小児期経験のみならずその後の心理的影響に対する介入の必要性が示唆されている。しかし成長後には小児期の出来事自体を変えることはできないものの、それによって生じる影響を軽減することは可能である。マルトリートメント体験に基づく症状には認知的要因が関与するとされ、自己否定的な自己認知や過去経験の否定的評価が抑うつや PTSD 症状と関連することが報告されている（Bellis et al., 2019；伊藤，2017）。こうした認知を強める要因として認知的フュージョンが注目されており、思考を現実の事実であるかのように捉えてしまう傾向が心理的適応を妨げる可能性が指摘されている。本研究では、小児期の軽度なマルトリートメント体験が認知的フュージョンおよび否定的認知を介して成人期の抑うつ症状に与える影響を検討し、介入ターゲットの特定を目的とする。

【方法】20 代 551 名（男性 181 名，女性 363 名，その他 7 名， $M=27.18$ 歳， $SD=10.10$ ）を対象に無記名式の Web 調査を行った。欠損値を含む回答，または逆転項目を含め全て同じ数値にしている回答を除いた 428 名（男性 127 名，女性 297 名，その他 4 名， $M=25.58$ 歳， $SD=2.93$ ）に対し分析を行った。調査材料は (a) 基本属性，(b) マルトリートメント傾向指標（唐他，2005），(c) 改訂認知的フュージョン 7 項目版（CFQ）（嶋他，2016），(d) 困難な経験に対する信念尺度（外山，2024）下位尺度の「有害性信念」のみ，(e) 自己肯定式尺度（平石，1990）下位尺度の「対自己領域」のみ，(f) うつ尺度 CES-D 簡易版（蒲原他，2009）の 6 つであった。なお，本研究は，目白大学人文社会科学系研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：24 人研-016）。

【結果と考察】本研究では，小児期マルトリートメント体験が成人期の抑うつ症状に及ぼす影響について，認知的フュージョンおよび否定的認知を媒介とするモデルを検討した。まずマルトリートメント傾向指標に対する確認的因子分析の結果，想定した因子構造は概ね支持された。記述統計では約 72% が何らかのマルトリートメント体験を報告し，体験有り群は体験無し群に比べ，認知的フュージョン，否定的認知，抑うつ症状が有意に高かった。体験有り群を対象としたパス解析では，マルトリートメント体験は認知的フュージョンと正の関連を示し，認知的フュージョンは自己への否定的認知および体験への否定的認知と関連していた。一方，抑うつ症状に直接影響していたのは自己への否定的認知のみであり，体験への否定的認知からの直接効果は認められなかった。また，心理的マルトリートメントは他の因子と比べ，認知的フュージョンとの関連が相対的に強かった。以上の結果から，マルトリートメント体験が抑うつに結びつく過程では，出来事そのものの評価よりも否定的な自己概念が重要であり，その背景に認知的フュージョンが関与している可能性が示唆された。臨床的には，体験内容の処理に加え，思考との距離の取り方や自己否定的信念への介入が重要と考えられる。本研究は回想報告および横断研究である点があるため，今後は縦断研究や介入研究による検証が求められる。